

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 24 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500698

研究課題名(和文) 体育授業における教師の言語的相互作用の適切性に関する研究

研究課題名(英文) A Study of the Relevance to Teacher's Verbal Interaction during Physical Education Classes

研究代表者

上原 禎弘 (KAMIHARA, Yoshihiro)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80552380

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校低学年(2・3年)の8学級の体育授業を対象とし、学習効果(態度得点)を高めた学級とそうでなかった学級の教師の発言を品詞分析により分析した。その結果、低学年期においても高学年期と同様に特定の8つの品詞の用い方が認められた。また、中学校期(2年)の事例的検討においても同様の結果が認められた。

これらのことから、義務教育段階においては、学習成果(態度得点)を高める体育授業の<文法>が存在するものと考えられた。

研究成果の概要(英文)：In this study intended for a physical education class of eight classes of the elementary school lower grades period (second and third grade). It analyzed the remark of the teacher of the class which enhanced a learning outcomes (attitude score) and the class which were not able to raise it by analyzing parts of speech. As a result, the usage of eight parts of speech was admitted like the upper grades period in the lower grades period. And a similar result was accepted in the case examination for the junior high school period (second grade).

From these, it was thought that the usage of explanation of "Grammar" in Physical Education Classes to make learning outcomes (attitude score) existed in the compulsory education stage.

研究分野：体育科教育

キーワード：体育授業 教師の言語的相互作用 適切性

1. 研究開始当初の背景

体育授業の主たる学習活動は、身体運動あるいは身体活動であるが、そこで営まれる実際の授業では、他の教科の授業と同様に、教師の言語的相互作用の学習成果に及ぼす影響は多大である。

1970年以降、アメリカを中心に体育授業分析のための多様な組織的観察法が開発された。これらの研究結果から、体育授業中の主な教師行動として「マネジメント」「学習指導」「巡視」「相互作用」の4つに区分され、中でも教師の「相互作用」が授業の雰囲気と授業成果に深く関係する重要な教授行動であることが明らかになった。

しかしながら、高橋(1992)は、これまでの組織的な観察方法では体育授業の基礎的条件(マネジメントや授業の規律、授業の雰囲気、学習従事量や運動量など)の適否は判断できても、内容的条件(授業の目標・内容の押さえ方、教材・教具の工夫、学習過程の組織化など)の適否を判断することはできないと指摘している。

これまで上原・梅野(2000、2003、2007a、2007b)は、相互作用活動における教師の発言に焦点を当て、文法上からもまた語彙の意味の上からも言葉の最小単位である品詞を基軸に、体育科の先行研究(相互作用研究)で認められた教師の作用言語(Interactional Words: 以下、IW品詞と称す)を分析単位として、学習成果を高める教師の言語的相互作用の適切性について検討してきた。すなわち、小学校高学年(5・6年)の走り幅跳び、サッカー、ハードル走の計39学級の授業を対象に、種々の学習成果(態度得点、技能、学習集団機能)を高める教師の言語的相互作用について報告してきた。これら一連の研究成果より、種々の学習成果を高める優れた体育授業を実践するためには、教師の言語的相互作用において特定の8つの品詞の用い方(11種類のIW品詞)、すなわち体育授業の<文法>が存在していることを明示した。ここでいう体育授業の<文法>とは、身体運動における子どもの「できる・わかる」に関わる言語を構成する諸要因間に見られる規則性を示しており、比喩的表現として<>で表記している。以下に、特定の8つの品詞の用い方の概略を示す。

助詞(文末終助詞)は、授業の雰囲気を明るくする作用がある。

副詞(疑問・強調・仮定)は、発問する際に用い、子どもの多様な運動の感じを引き出す作用がある。

形容詞(対比)は、子どもの課題(めあて)を明確にする作用がある。

名詞(人名)、代名詞(人称)は、子ども一人ひとりに相互作用の動きを高める作用がある。

副詞(程度)は、ジェスチャやフィンガーアクションなどの身体的所作とともに用い、子どもの課題解決に必ず動きのイメ

ージを明確にする作用がある。

名詞(動作)、名詞(時間)、名詞(空間)は、各種の運動教材が有する技能特性を明確に伝達する作用がある。

名詞(身体部位)は、子どもの動きのイメージを具体化する作用がある。

形容詞(肯定的)は、技能が向上した子どもの動きを認める作用がある。

上記～は主として態度得点と学習集団機能の向上と関係し、～のそれは主として態度得点、学習集団機能、技能の向上と関係し、～は主として技能の向上と関係していることが認められた。とりわけ、

の3つは、教師の運動課題についての理論的知識(客観的で分析的な言葉)を子どもの主観的な運動の感じ方へつながる言葉へと変換(翻訳)する働きを、～は子どもの主観的な運動の感じ方を客観的で分析的な言葉に変換(翻訳)する働きをそれぞれ有するものと考えられた。

2. 研究の目的

本研究では、小学校低学年及び中学校期の体育授業を対象に、学習成果(態度得点)の高い学級とそうでない学級における教師の発言を品詞分析し、学習成果(態度得点)を高める教師の言語的相互作用について検討し、それぞれの学校期における体育授業の<文法>の存在を追求する。さらに、小学校低学年、高学年、中学校期の品詞の用い方の比較から、その共通性と異質性について検討を加え、義務教育段階における体育授業の<文法>の構造とその規則性について総合考察をする。

3. 研究の方法

(1)本研究の小学校低学年期の対象授業は、2年4学級(カバディ)と3年4学級(マット運動)の授業実践(8時間)を依頼した。一方、中学校期の対象授業は、2年1学級(走り幅跳び)の授業実践(9時間)を依頼した。

(2)学習成果として、単元前後における子どもの授業に対する愛好的態度を小学校2年は梅野・辻野(1980)、3年は奥村ら(1989)、中学校2年は小林(1978)の態度測定法をそれぞれ用いて測定した。1単位授業の評価は、高田・小林の「よい授業への到達度調査」(小林、1978)を毎授業後に実施した。

(3)授業記録の収集として、各学年の各単元過程の中心である2・5・8時間目の授業をICレコーダーを用いて収録し、教師の発言内容の逐語記録を作成した。

(4)品詞分析は、名詞、動詞、副詞といった一般品詞の使用頻度の違いを比較・検討するものであるが、これ以外に体育科の「相互作用」に関する先行研究に基づいて、表1に示す観点からの品詞(IW品詞)も分析単位とした。なお、小学校低学年期の品詞分析は、学習成果を高めた4学級(2年2学級、3年2学級)とそうでない4学級(2年2学級、3

表1. 先行研究にもとづいて設定した品詞と具体例

品詞名	具体例
助詞(終助詞)	「…ね」「…よ」「…の」「…な」「…かな」「…わ」の6つ
名詞(固有名詞)	「君」「さん」「ちゃん」など
代名詞(人稱)	「あなた」「あんた」「きみ」「彼」など
副詞(疑問・強調・仮定)	「なぜ」「なんで」「どう(して)」など
形容詞(対比)	「速い-遅い」「長い-短い」「高い-低い」など
副詞(程度)	「しっかり」「こう(して)」「ぱっと」など
形容詞(肯定的)	「すばらしい」「いい」「うまい」「きれい」など
感動詞(肯定的)	「よーし」「よっしゃ」「おーし」「ええ」など
名詞<身体部位>	「膝」「肩」「足」「手」「頭」「腰」「腕」など
名詞<動作>	「助走」「踏み切り」「歩幅」「助走スピード」などの走り幅跳び教材の運動局面及びテクニカルターム
名詞<時間>	「今」「さっき」「最初」「…(する)とき」など
名詞<空間>	「前」「横」「後ろ」「上」「下」「右側」など

年2学級)を比較・検討した。一方、中学校期は2年1学級の事例となり、先行研究(上原・梅野、2000)の小学校高学年の走り幅跳びのデータと比較・検討した。

4. 研究成果

(1)小学校低学年(2・3年)において学習成果(態度得点)を高めた学級(上位群)とそうでない学級(下位群)の1単位授業における一般品詞の総数を比較した結果、上位群は約3,700語で、下位群は約2,150語であった。

(2)1単位授業における各一般品詞の使用頻度を比較した結果、その他を除く、すべての一般品詞において上位群の方が下位群に比して有意に使用頻度の多い結果であった。

(3)1単位授業におけるIW品詞の使用頻度を比較した結果、すべてのIW品詞において上位群の方が下位群に比して使用頻度の多い結果であった。とりわけ、形容詞(対比)、形容詞(肯定的)、感動詞(肯定的)の3種類のIW品詞において有意差が認められた。

(4)1単位授業における課題把握場面(約7分8秒)と課題解決場面(約32分12秒)のIW品詞の使用頻度を比較した。課題把握場面では、形容詞(対比)、形容詞(肯定的)、感動詞(肯定的)の3種類のIW品詞において有意差が認められた。これらのIW品詞は、いずれも1単位授業の比較においても有意差の認められた品詞であった。また、課題解決場面では、形容詞(対比)、形容詞(肯定的)、感動詞(肯定的)、名詞(時間)の4種類のIW品詞において有意差が認められた。このうち、名詞(時間)を除く3種類の品詞は1単位授業の比較においても有意差の認められた品詞であった。

(5)上記(4)の結果から、低学年の上位群では、形容詞(肯定的)と感動詞(肯定的)を用いて、授業の雰囲気盛り上げ、ピグマリオン効果により学習成果(態度得点)を高

めているものと推察された。さらに、「映像的把握」の段階にある低学年の子どもに対して「観察学習」を多く取り入れながら、視覚的・聴覚的な情報(形容詞:対比、名詞:時間)を伝えているものと推察された。ちなみに、高学年の子どもは、「記号的把握」の段階にあり、発問活動(副詞:疑問・強調・仮定)を用いて課題の意味理解を促進させ、子どもの運動の感じを引き出していることが報告されている。

(6)上記(5)で有意差の認められたIW品詞がより多く使用されている特徴的な場面を逐語記録から取り出し、低学年の具体的な指導の手立てを検討した。その結果、課題把握場面では、「観察学習」、「対話から問いかけ」の2つの指導の手立てが認められた。また、課題解決場面では、「観察学習」、「言語的合図」、「動きの診断」の3つの指導の手立てが認められた。

(7)上記(6)の結果から、低学年においても高学年と同様に、課題把握場面では「子どもの課題を理解するための言語的相互作用」を、課題解決場面では「運動教材のもつ技能的特性に出会わせる言語的相互作用」をそれぞれ展開しているものと考えられた。

(8)低学年の教師の言語的相互作用が授業を受ける子どもの学習行為に対してどのような影響を及ぼすかについて検討した。すなわち、態度得点の最も高かった2年A学級の「よい授業への到達度調査」の各項目の記述内容から分析した。その結果、A学級では指導プログラムの内容と子どもの「新しい発見」項目の記述内容がよく対応していた。さらに、A学級では、単元経過に伴って子どもの多様な運動の感じが発生し、集約・深化されることが認められた。

(9)これらのことから、学習成果(態度得点)を高める低学年の教師の言語的相互作用は、高学年と同様に、子どもの多様な運動の感じの発生とその深化を促進させる働きを有するものと考えられた。加えて、低学年の教師は、子どもの工夫した動きを誉めて授業の雰囲気盛り上げながら、課題把握場面では子どもの課題を明確にさせ、課題解決場面では動きのイメージをより具体化させることがそれぞれ認められた。

(10)中学校期は、2年1学級の事例となり、先行研究の小学校高学年の走り幅跳び(同一プログラム)のデータとの比較・検討となった。その結果、学習成果(態度得点)を高めた学級は、一般品詞の総数ならびに各一般

品詞の使用頻度、1 単位授業における IW 品詞の使用頻度、課題解決場面と課題解決場面における IW 品詞の使用頻度のすべての比較・検討において、使用頻度の多い少ないはあるものの、小学校高学年期と同様の傾向が認められた。

(11)以上のことから、義務教育段階においては、学習成果（態度得点）を高める特定の 8 つの品詞の用い方、すなわち体育授業の〈文法〉が存在するものと考えられた。

<引用文献>

高橋健夫、体育授業研究の方法に関する論議、スポーツ教育学研究特別号、1992、19-31.

上原禎弘、梅野圭史、小学校体育授業における教師の言語的相互作用に関する研究 - 走り幅跳び授業における品詞分析の結果を手がかりとして -、体育学研究、第 45 巻第 1 号、2000、24-38

上原禎弘、梅野圭史、小学校体育授業における教師の言語的相互作用の適切性に関する研究 - 学習成果（技能）を中心として -、体育学研究、第 48 巻第 1 号、2003、1-14

上原禎弘、梅野圭史、小学校体育授業における教師と児童の言語的相互作用の適切性に関する研究 - 小学校高学年のハードル走授業を対象にして -、体育学研究、第 52 巻第 1 号、2007a、1-17

上原禎弘、体育授業における教師の言語的相互作用に関する研究 - 小学校高：学習集団機能を中心として -、教育実践学論集、第 8 号、2007b、175-186

梅野圭史、辻野昭、体育科の授業に対する態度尺度作成の試み - 小学校低学年児童について -、体育学研究、第 25 巻第 2 号、1980、139-148

奥村基治、梅野圭史、辻野昭、体育科の授業に対する態度尺度作成の試み - 小学校中学年児童について -、体育学研究、第 33 巻第 4 号、1989、309-319

小林篤、大修館書店、体育の授業研究、1978、pp.170-258

5 . 主な発表論文等 該当なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

上原 禎弘 (KAMIHARA , Yoshihiro)

兵庫教育大学・学校教育研究(研究院)・
准教授

研究者番号・80552380